

雲南における白族と漢族の関係： 民族的アイデンティティの変化に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 廣子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002306

雲南における白族と漢族の関係 —民族的アイデンティティの変化に関する考察—

横山 廣子*

1. はじめに

中国の民族に関する現状の一つの大きな特徴は、漢族が人口の92パーセントという圧倒的多数を占めていることである。これについては、そもそも漢族という集団自体が、漢字を有していた中原地域を中心とする勢力が、周辺の諸民族と接触し、次第に彼らをもその集団内部に融合してゆく過程の中で形成されてきたからだと言われる。このような非漢民族の漢族への同化は、中国の長い歴史と広大な領域のいろいろな時点・地点で生じたと言われているが、それが実際にいつ、どこで、どのような条件の下に、どのような過程をたどって起こったかについての、具体的かつ実証的な研究は、それほど多く行われているとは言えない。この過程を明かにしようとする際、民族の移動とそれによって引き起こされる民族間の接触に注目しなければならないのは言うまでもない。

中国の西南端に位置する雲南省は、中国全土から見ればまさに辺境の地であり、そこに本格的に多数の漢族がやってきたのは、明代初期のこととされる。流入した漢族とそれ以前から雲南に居住していた人々との間にどのような民族間関係が結ばれ、それがどこで、どのような変化をもたらしたのか、それを過去から現時点までたどりながら明らかにしていくのは容易ではない。しかし、現在でも当地の人々の生活や文化、あるいは伝承、さらには歴史の痕跡を残す過去の人々の創造物を丹念に拾い、歴史文献の記録を併せて考察することにより、何らかの理解に近づくことはできるのではないか。本文は雲南省楚雄州において1990年以来筆者が行ってきた調査に基づき、移動によって生じたであろう非漢民族と漢族の接触がもたらしたと思われる変化を、民族間関係の視点から考察する。

2. 楚雄州の民族構成と歴史的背景

1990年の人口調査によれば、楚雄彝族自治州の全人口約230万人中、民族別の内訳は、漢族が約163万人でほぼ7割に達し、つづいて彝族が約56万人である。この両民

* 国立民族学博物館

族だけで全人口の94パーセント以上になり、それに続くミャオ族、回族、タイ族、ペー族の各人口は、いずれも2パーセントを上回ることはない。楚雄州の漢族は、その70パーセント以上が市街地および平地に居住しており、山地に分散して居住する者は30パーセントに満たない。それに対し、イ族は大多数が山地あるいは中間山地に居住し、都市や平地に居住する者は極めて少ない。つまり、漢族とイ族は、それぞれ平地と山地を主たる居住地とし、今日の楚雄州の民族分布は、一口で言えば、この2つの主要民族が異なる地理的環境にほぼ棲み分けているといった状況である（地図）。

しかし、楚雄州は他の雲南各地と同様、漢代には西南夷の地とされ、中原の漢族から見ると、未開な異民族の割拠する土地であった。雲南への漢族の流入は、その前後から始まったと思われるが、その数はわずかで、時を経て次第に非漢民族化してしまつたとされる。また、唐代にそこに出現した統一政権である南詔は、唐に戦勝して漢族兵士を捕虜としたり、四川の成都に出兵して技術や知識を備えた漢族を多数連れ帰ったが、雲南地域が中国の版図外にあった南詔国とそれに続く大理国の時代に、それらの漢族も土着化し、非漢民族の中に融合していったと考えられている。その後、元朝の支配下となって、雲南に再び漢族が流入するようになるが、その数は多くないと推測されている。そして大きな変化が訪れるのは、先述したように明代初期である。

洪武14（1381）年に南京の明朝政府から雲南に軍隊が派遣されて雲南が平定され、その後、各地に軍の衛所が置かれ、屯田が進められた。明代初期に省外から雲南に流入し、駐留した兵士の数は約9万人余りで、その家族や関係者などを併せて「軍戸」として登録された人口は約30万人と言われる。楚雄については、『明実録・太祖実録』中に、洪武20年に楚雄から景東まで百里ごとに屯営を置いて異民族に対する防備をせよとの命が下されたことが記されており、楚雄州内には楚雄衛をはじめとして4ヶ所に千戸規模の軍屯が設置された。軍屯は楚雄州の平地部、特に主要交通路付近に分布していた。

それでは、それらの地域、つまり楚雄州の平地部には、軍屯による外部からの移住者が来る前、どのような人々が住んでいたのであろうか。元代、14世紀初頭に書かれたとされる『雲南志略』には、雲南の非漢諸族の名が列挙されているが、当時、「威楚」と呼ばれた楚雄地域に居住すると記されているのは、「白人」すなわち「僰人」で、これは現在のペー族の先人とされる人々である。明代初期の景泰6（1455）年の『雲南図経志書』では、楚雄府の風俗について、府の役所付近は旧漢人、つまり元代に移住してきた者が多く、僰人と雑居していると記している。隆慶『楚雄府志』（1586年）中でも楚雄に土着の人々として「僰人」の名称が散見される。この「僰

人」あるいは「白人」は、清代半ば頃までは、楚雄州内の各地でその存在が記録されている。しかし、近代以降は、大量の「白人」が漢族の中に融合していったという〔楚雄彝族自治州地方志編纂委員会編 1993〕。今日、州内でペー族として登録される人口はごく少数である。

90年の楚雄州内のペー族人口は12457人で、そのうちの6割以上の7656人は南華県に住む。そこには、ペー族によって構成される村落が集中する地域があり、雨露ペー族郷がある(地図)。このペー族郷とそれに接続する徐営郷の一部では、ペー族が集落を形成して居住している。雨露郷は丘陵地帯および山地からなる地域で、山地にはイ族、丘陵地帯にはペー族と漢族の集落が分布している。総人口1万3457人(1994年末統計)のうち、最も多いのはイ族の43パーセント、次いでペー族が39パーセント(5153人)、漢族は18パーセントを占める。平地部に比べれば交通や農業生産の条件に恵まれない雨露郷では、この割合からもわかるように、ペー族がイ族や漢族と接しながらも他の集団の中に融合してしまうことなく、ペー族としてのアイデンティティを維持してきたわけである。ここは郷としては、少数民族人口が8割を超えており、漢族の勢力の弱い地域で、合計で2000人余りの漢族の村々は、主として河川沿いのミカンやサトウキビも栽培できる地域に、ペー族の村に隣接して分布していた。

平地部にいた「僰人」が漢族に同化していったという鳥瞰的な構図は、歴史文献から描けるとしても、それは具体的にはどこで、どのようにして起こり、外部から来た漢族と漢族に同化した人々とはどのような関係をもちつつ融合したのであろうか。

3. 「民家籍」と「江西籍」

楚雄州の州政府所在地、楚雄市鹿城鎮の南あるいは南西の郊外、20キロ余りのところにある東華鎮および子午鎮は、平地が多く、現在、住人の大多数は漢族である。しかし、その漢族の祖先の来歴や系譜に関する説明を詳しく聞くと、いくつかの特徴的な言説が出てくる。その1つが、「民家籍」と「江西籍」という言い方である。

この表現を最初に耳にしたのは、地域の祭りとして有名な「火把節」、つまり松明祭りの期日について、子午鎮で私が尋ねた時であった。土地の人は、期日には6月24日と25日の2種類があり、漢族の中で一般に「民家籍」は6月25日、「江西籍」は6月24日であると述べた。漢族においては、原籍地、つまり祖先の出身地によって自身を位置づける伝統があり、「何々籍」という言い方自体は目新しいことではない。さらに、土地の人は、民家籍の者は大理から来ており、それは楊、王、高、段の4姓の者たちであると付け加えた。「民家」といえば、ペー族という民族名称が1956年に確

定する前、現在の大理地域のペー族は漢語では皆「民家」と呼ばれていた。

火把節は雲南各地の多くの民族に見られるが、現在、大理ペー族自治州では6月25日、楚雄族自治州では6月24日をその祭日とすることが州政府によって決められ、期日が1日ずれている。この決定は80年代になって行われたものだが、それは慣習に基づいて決められたと思われる。州として見た時、伝統的に大理州では25日、楚雄州では24日に火把節を行うのが優勢であるという事実があるのである。また、この違いは、偶然の違いと片付けられない背景を伴っているように思われる。それは次のように要約できる。

雲南省の地方志の火把節に関する記載の中には、漢人と土着の非漢民族との間、あるいは地域によって期日が異なると記載されていることがある。また、地方志間で期日が異なり、それはほぼ24日と25日に分かれる。25日の地域は、現在もペー族の人口がイ族よりも優勢であったり、現在はペー族人口がなくとも、歴史的にペー族が居住していたとされる地域に多いという傾向が観察された。ここから、私は、一般に24日はイ族、25日はペー族との関係が深く、これがどこでも絶対的に分かれているわけではないが、地域によっては、この1日の違いが民族間の境界となる場合があると指摘した。また、省全体に関する記述では、清代17世紀末の康熙『雲南通志』までは25日が火把節となっているが、乾隆『雲南通志』以降は24、25日と両日併記になる。そこで、明代は雲南の文人の中で大理出身者がかなり目立ち、省都は昆明であっても、大理が雲南の文化の重要な中心地として一定の意味を持っていたが、その状況が、流入した漢族人口が非漢族人口を超える16世紀後半頃から変化し、そのことが期日の記載にも反映しているという可能性を提示した〔横山 1994〕。

子午鎮の「民家籍」という楊、王、高、段の4姓は、大理のペー族に多い姓である。このことと火把節の期日に関する状況を考え合わせるならば、子午鎮において「民家籍」と言う人々が、かつて、現在のペー族と同じ民族的アイデンティティを持っていた可能性、つまり、隆慶『楚雄府志』などに記される「楚人」であった可能性が十分に考えられる。そして「江西籍」と言う人々が、外来漢族あるいは場合によってはイ族であったならば、大理やペー族との結びつきの強い25日でなく、楚雄やイ族との結びつきの強い24日に火把節を行うことに、不思議はない。この点で非常に興味深いのは、子午鎮内のM村において聞いた話である。そこは、解放後にダム建設で水没した地区から移ってきた数戸を除くと、全村が王姓で構成される。M村の老人は次のように語った。

「村の周辺には江西籍の者が多いが、この村の者は民家籍、つまり大理籍で、江西

籍の者はいない。そして、今では漢族になっているが、元来は漢族ではなく、祖先は大理国の者であった。かつて、江西籍の者が6月24日にやって来て、民家籍を消滅させようとした。村の祖先はそれからは逃れることができたが、江西籍の者がやってきた日なので、6月24日には火把節を祝わない。」

しかし、子午鎮の多くの人々が語ることは、このM村の老人のように明確かつ理路整然としたものではない。一般に火把節の期日を聞くと、年配者の多くが上述の「民家籍」と「江西籍」の対比による説明をするのだが、祖先の由来を聞くと、自らの家系を民家籍と言う者の中に、民家籍でありながら、また江西籍でもある、という者があり、また、祖先は大理から来た南京籍あるいは山西籍であると言う者もあり、その言説は多分に矛盾をはらんでいる。その背景には単なる錯誤も、また故意の隠蔽や偽装もあるかもしれないが、いずれにしても、何故、そのようなことが起こるのかを考えることが重要であろう。

4. 祖先の来歴

たとえば、子午鎮Y村に居住し、自身は火把節を25日に行う「民家籍」だと声明しながら、同時に祖先は江西籍でもあるという楊G氏の場合、「江西籍」の根拠は、祖先が「南京応天府江西柳樹灣」から来たからだという。この楊G氏の記憶する「南京」と「江西」とを組み合わせた故地の名は、恐らく何らかの錯誤の結果であると思われる。この楊G氏の楊家には、祖先のためにかつて石碑に刻まれた銘文が少なくとも2点があり、そのうちの1点は1部が欠けているが現在も墓碑銘がそのまま残っており、もう1点は現物はなくなってしまったが、銘文は筆写して保存してきたという。

現存する墓碑銘は、陝西省鳳翔県の知県を務めた楊恵が、その亡母のために明代正統9（1444）年に立てたものである（写真1）。それは、楊家は代々、雲南楚雄県に居住すると記す。もう一の、道光1（1821）年に子孫が前の碑を立てた楊恵のために刻んだとされる銘文を筆写した文書には、楊恵は当時の楚雄、つまり威楚路の人で、その始高祖である楊珠は、十余歳で南京応天府から雲南に来て、楚雄の地を選んだと記されている（写真2）。

墓碑銘の「代々楚雄に住む」という記述は、始高祖の珠公が楚雄に定着してから代々住む、ととれないこともないが、そこには「南京応天府」の文字は全くない。それよりも、もう1つの記述との間には、完全な食い違いが他にある。正統年間の碑では楊恵の母は段氏となっているのだが、道光年間の方では母は劉氏である。父の名はいずれも保で、これは出入りが無い。正統9年の銘文中の母、段氏は明洪武8年に生

まれ、正統2年に享年63歳で没している。ところが道光年間の銘文にある劉氏は85歳で亡くなっており、楊恵は元朝の郷賢とされていて、これは、隆慶『楚雄府志』（1568年）以降の地方志に楚雄県出身の元朝の郷賢として記される「楊恵」に関する記載内容と一致する。両方とも鳳翔県の知県であった親孝行な楊恵が亡母のために墓を立てるといふ点では変わらないが、母の名と卒年、そして時代が一致せず、どちらがより事実に近いのかといえ、墓碑銘そのものが現存し、時代が早く、楊恵自身が立石した正統年間の方であろうと判断せざるをえない。この墓碑は、さらに後述するもう1つの大きな特徴から見ても、明代の貴重な歴史的遺物といえる。

祖先が南京から移住して来たという伝承は、かつて牧野巽が指摘したように、民家（ペー族）や漢族など、雲南の諸民族に広く見られ、牧野は、これは漢族から非漢民族へと伝播したものだとしている。南京伝承中の移住の契機は、明代初期に従軍して来たというものが圧倒的に多い。しかし、牧野は、実際の明の軍隊中には南京出身者はあまり多くなく、各地の出身者から構成されていたことを『明実録』によって実証し、それにもかかわらず南京伝説が目立つのは、「当時の南京の文化的政治的優越」〔牧野 1985：154頁〕が産んだ現象であると想像している。さらに牧野は、南京伝説が明代初期から直ちに雲南において優勢であったかは疑問であるが、16世紀後半になって出た李元陽纂の隆慶『雲南通志』によって、明中期にはすでに江南伝説が成立していたことが推察されると述べている。また、南京からの移住伝承は事実を反映したものと見る必要がほとんどないこと、そして雲南の諸民族の中でも特に大理国の遺民であるペー族の間に、漢族よりも一層、その伝承が広がっているように見えること、などの重要な指摘もしている。

これらの事実や指摘を総合すると、Y村の楊氏の祖先については、明代初期にはまだ有力ではなかった南京伝承が、その後、広く流布するようになり、それが道光年間の銘文に付け加えられたと考えることもできる。

また、上記の銘文資料を保管していて、それらに比較的精通している楊G氏が、南京と「江西」を結びつけて記憶していた故地名は、大理地域などで祖先の来歴に関する口頭伝承によく登場する「南京応天府大壩柳樹灣」という地名の中に、さらに「江西」を加えた構成になっている。ということは、「民家籍」と「江西籍」が対になって言及されることでもわかるように、特に楚雄の楊G氏らの住む地域では「江西」が注目される傾向があるとも言えよう。

楊G氏と全く同じタイプの口頭説明は、子午鎮と同様に楚雄市内にある東華鎮で高姓が集中するM2村でも聞かれた。自分たちの原籍は江西籍で、南京応天府大壩柳樹

湾の者であるという。また、同様の「民家籍」と「江西籍」の併立は、楊G氏の住むY村のH姓の場合にも見られた。H姓は村の有力な宗族で、解放前の当地最大の地主がこのH姓の一員であり、またY村にあった4つの祠堂で最も大きいのはこのH姓の祠堂であった。解放後はH姓に対する扱いが最も厳しく、現在、H姓の祖先の来歴に関する家譜や位牌、墓碑などの資料は全く失われている。長老に祖先の故地を聞くと、「江西籍」で、江西の高台子柳樹湾から移住してきたと言いながら、江西からまず大理に入ったので、「民家籍」でもあるという答えが返ってきた。同じく子午鎮のF村の段氏の祖籍に関しても同様に両籍併立の説明がなされた。

また、東華鎮のL村には子午鎮Y村の楊G氏と祖先を同じくする楊氏が居住し、彼らは解放前まではY村の楊氏と合同の祖先祭祀を毎年続けてきた。このL村の楊氏に祖先について尋ねると、江西の洛陽県の者で、江西籍だという。これは楊G氏の手元にある文字資料とも、また楊G氏自身の口頭説明とも違う内容である。

他方、東華鎮のL村にはもう1つ別の楊氏が居住しており、Y村の楊G氏とは祖先を異にすることを自他ともに認識している。その楊氏の中の1軒の家は、年代の不明なある碑銘を所有している。それは祖先の墓にあったものなので、保管しているという。その碑銘には祖先として「楊公諱諭城海」という文字が刻まれ、名前が「諭城明」であることが注目される。同じ碑銘に、祖先は「葉榆（大理の旧名）」から来ており、その源を忘れないために名前に「諭城」を付けたという説明が続けられている。漢族には普通見られないこのような3文字からなる名前は、宋代の大理国時代を中心としてペー族の先人に見られる特徴としても有名でもある¹⁾。ところが、その碑銘の持ち主に祖籍を聞くと、「山西籍」だという。この家には上述の碑名のほかに、歴代の祖先の名前を紙に記した位牌があり、その中央には「山西籍太原郡文林郎、皇明誥授雲南大理府州吏文部署、特品行政期滿轉居、滇西楚邑、始祖楊諱諭城海、王太君、暨楊問歷代姻親昭穆、考妣香席」とある。ここでは山西籍であると同時にまた大理との関連も明かである。

以上のように、楚雄市の子午鎮と東華鎮に居住する漢族の中で、6月24日ではなく、25日に火把節を行うという人々を追いかけて、その祖先の来歴を尋ねていくと、ほと

¹⁾ 大理時代に3文字名が多く見られたことは、宋代の『桂海虞衡志』に大理から横山寨（現在の広西の田東県内に所在）の馬市にやってきた者として挙げられている李観音得、董六斤黒、張般若師の3名の名前からもうかがえる。ペー族の命名に関しては、張錫禄の研究などがある〔張1992〕。

んどの場合、大理から来たとか、民家籍だとか民家であるといった言説が登場した。しかし、それは質問に直ちに返ってきた答えというより、いろいろな話を伺っていくうちに出てくる言説であった。ここで特に注目したいのは、祖先の来歴は、大理とか民家だけに終わらず、多くの場合、それに加えて、あるいはむしろそれを言う前に、南京や江西などから移住して来たという説明がなされるという点である。何故、南京や江西を故地と言うのか、この点は考察を加える必要がある。さらに、それらの人々のところでは、火把節の期日に加えて、現在あるいは過去において大理あるいはペー族と強く結びついている別の文化的特徴が見出された。すでに述べた3字名もその1つであるが、ほかにも重要な特徴がある。

5. バイイー墳

東華鎮から子午鎮にかけての地域には、現地の人々が「バイイー（焚夷あるいは白彝と漢字では表記）墳」と一般に呼ぶ古い墓が、少し小高いところに見られることがある。土地の物知りとされる者の中には、「バイイー」とはタイ族のことで、彼らは自分たち漢族がこの地にやって来る以前の住民である、と説明する者がある。「バイイー」は、漢族が来たためにここから去ったのであり、それを「漢到夷走」あるいは「漢来夷走」というのだという。

楚雄イ族文化研究所の研究者の大半は「バイイー」はタイ族ではなくイ族である、と主張する。その根拠として挙げるのは、「バイイー墳」が多数見つかった子午鎮Y村のYという村名が彝語に由来すると思われること、Y村の方から移住してきたというイ族が、子午鎮より南の地域で見出せること、イ族の漢語の他称名に「白彝」というのもあること、などである。

土地の物知りが「バイイー」はタイ族のことだ、というのは、彼らの経験と知識に基づいている。解放前には、この地域の男性のかなりが、秋の収穫を終えると南の景東などタイ族の居住する地域に行商などの出稼ぎに出かけており、彼らはタイ族が「バイイー（漢字では焚夷あるいは擺夷と表記）」と呼ばれることをよく知っていたのである。

この「バイイー墳」とは、どのような墳墓であろうか。子午鎮Y村ではそれが19基も見つかっており、現在までになんかが掘り起こされたものの、まだいくらか残っており、その様子を知ることができる。上から見ると、お供え餅のように、上にいくほど小さい円盤状の石が2段ないしは3段重なっており、その下には火葬した骨を収納する壺が埋められていた(写真3)。要するに火葬墓であり、現在の土地の人々の埋葬

墓とは全く様相を異にしている。Y村の「バイイー墳」は村の後方の丘の上であり、その帯には埋葬墓も点在している(写真4)。埋葬墓は、墓碑が刻まれていない場合でも、どの家の祖先の墓かは村民は周知している。他方、火葬墓である「バイイー墳」に対しては、村人は、自分たちの祖先の墓という認識はない。たとえば、楊G氏は、自分たちの祖先の墓であれば、そのことが伝承され、祖先祭祀の対象となるはずだが、自分の知る限り、そのようなことはなかないと述べた。

「バイイー墳」は現在のどの民族と関わりを持つと考えるべきなのであろうか。楚雄以外にも雲南では大理国時代(宋代)から元代、明代にかけての火葬墓が広く分布していることが知られている。清代初年に地方官吏が火葬を禁止したので、清代になると火葬墓はきわめて少なくなったという[李 1960]。火葬墓に関する従来の雲南における研究は、50年代から60年代にかけてかなり盛んであった時期があり、雲南省西部の現在の大理ペー族自治州とその周辺での発掘や調査が行われた。その時代に発見された火葬墓は、ペー族のものとするのが一般的であった。しかし、楚雄州においては、1973年に禄豊県で発見された元代初期から明代初期までの火葬墓群について、イ族の墓と断定する研究がある[葛 1984]。しかし、ここでは『雲南志略』に記される、一般にはペー族の先人とされる「白人(燧人)」もイ族であるとの前提で議論がなされており、その部分から検討をする必要がある。

禄豊県でもまた子午鎮でも、火葬墓の特徴は、遺骨が素焼きないしは釉のかかった壺に納められている点である。同じ『雲南志略』の元代の状況に関する記載を重視するならば、そこで、遺骨を容器に入れて埋めるという特徴がもっとも明確なのは「白人」であって、現在のイ族の先人とされる「羅羅」ではない。また、ペー族のものとする火葬墓の場合、墓石や墓碑に仏像や梵字がしばしば刻まれ、仏教との深い結びつきを示す。『雲南志略』も「白人」がきわめて熱心に仏教に帰依していると記している。また、一般に、元代の雲南の少数民族では唯一、ペー族のみが熱心な仏教徒集団として知られ、その点で他の少数民族とは明らかな区別があると考えられている[尤中 1994]。

子午鎮一帯で見つかった火葬墓で私が直接目にしたものについては、仏像や梵字を確認していないし、その年代に関する資料も得られていない。しかし、まだ訪れてはいないY村から3キロのところにあるZ村では、3層状の火葬墓の中の2基に、それぞれ「故香令楊録之墓」、「故香令楊杰之墓」と刻まれていたという。そして、これについて、現地の学者は、明代になって大量に流入してきた漢族の影響を受けてイ族が刻んだ、と推測している。しかしここで、前述のY村の楊G氏の明代正統9

(1444)年の墓碑銘に見られる、ここまで述べてこなかった1つの大きな特徴に着目するなら、別の推測も可能であるように思われる。

その墓碑銘には、すでに述べた内容が漢文で記されているが、実はこの墓碑銘は両面に文字が刻まれている。漢文の裏側にはデーバナーガリー系の文字が記されており、それは梵經典であった(写真5)。漢字とともに梵字を刻んだペー族のものと思われる墓碑が大理地域を中心にかなり大量に出ており[張 1993]、研究者の間では知られている。同様のものは、他の地域ではこれまで発見されていない。Y村の楊G氏は一大決心をしてこの墓碑銘を私に見せてくれたようで、「その文字は漢族ではなく、バイイーの文字ではないか。よくわからないが、私の祖先はバイイーかもしれない」と複雑な表情で、大事に保管していたそれを出してきてくれた。どのような形状の墓からその墓碑銘が発見されたかは、楊G氏もわからず、したがって、これが火葬墓のものであるかどうかは不明である。しかし、大理地域ではそれに非常によく似た漢字と梵字の両面の墓碑銘が、火葬墓群の中から出ている。

以上の数々の状況を総合すると、楊G氏の楊家の人々をはじめとして、楚雄市郊外の子午鎮から東華鎮一帯に現在居住する漢族の中には、元来、その祖先が、現在ペー族である人々の先人と同一のカテゴリーに属していた人々がいる、とほぼ断定してよいように思われる。その人々の祖先は、非漢民族から漢族へと民族的アイデンティティを変更した可能性がきわめて強いのである。

6. 南華県のペー族との比較による考察

現在でもペー族が集中して居住している楚雄州南華県雨露郷でも火把節や「バイイー墳」に相当するものはある。しかし、そこでは、火把節は州内の一般のイ族と同様の6月24日に行われる。また、「バイイー墳」に関しては、その言葉自体、あまり通用していないようであった。しかし、火葬墓の状況を説明してそのようなものがあるかと尋ねると、自分たちの祖先の墓ではない、壺の埋まっている、漢文の裏にイ文字が書かれている墓があるという答えがある年配者から返ってきた。イ文字だからイ族の墓であろう、とは言うものの、それが果たしてどのような由来の墓なのかについては、誰も明確な説明ができなかった。ここで注目されるのは、そこではこれまでのところ、「漢到夷走」という言い方がされないということである。

また、彼らの祖先の来歴については、山東や河南が故地として挙げられるが、祖先はそれらの原籍地から大理に来て、それからいくつかの地を経て雨露にたどり着いた、という話の筋書きが一貫して明確であり、民家籍と江西などその他の籍が対立して語

られることはなかった。

他方、東華鎮や子午鎮では、最初は自分たちは漢族であると強く主張していた人々が、次第に話を交わしていくうちに、自分たちの祖先は「民家」、つまり現在のペー族であると認め、次のようなことを語るに至ることもあった。ある者は、解放前に、民家語を数語だけ話せる宗教的職能者に依頼して宗教的儀式を行ったことがあることを思い出した。また、今年65歳の男性の曾祖父は民家語を話すことができたという。また、ずっと前は民家語を話したら殺されたので、次第に民家語が消えてしまったのだという者もあった。

これらの断片の情報から、楚雄市の子午鎮から東華鎮の一带では、雨露郷に比べて、民家語を話すことがはばかられたり、「民家」であることを隠したいと思うような状況があったのではないと思われる。そして、その最大の要因は、外から流入してきた漢族のより大きな存在ではなかったのか。雨露郷の人々に比べて、彼らの言説の後ろには、「漢族」の影がより鮮明に見えるように思われる。楚雄市における祖先の来歴に対する複雑な言説、広く知られる「漢到夷走」という表現、そこでは火把節の期日のずれが民族的境界として意味を持っているように思われる事実、これらのことは漢族との接触の結果、生じたものではないだろうか。祖先が南京や江西から来たと言語するのは、やはり、自らを「漢族」として位置づけるためであろう。元来、非漢民族であった彼らにそうさせる状況があり、それは漢族の存在、漢族からの何らかの影響を抜きにしては考えられない。

それが正しいならば、何故子午鎮や東華鎮においては雨露郷よりも漢族の影が色濃いか。子午鎮から東華鎮にかけての地域は現在の楚雄州、つまりかつての楚雄府の政治の中心地に近く、それゆえ、政治的権力を握っていた漢族の影響力をより強く受けたのか。あるいは、雨露郷に比べると居住地としての条件に恵まれており、それゆえさまざまな目的で流入する漢族の数が多かったのか。あるいは、軍屯関係の漢族との接触のより多い土地であったのか。また軍屯は、明代の初期を過ぎると、そこから逃げ出す者も出現し、その土地の出身者によって欠員を埋める場合も見られた。そのような過程の中で、子午鎮や東華鎮では軍屯あるいは軍屯の人々との接触が多かったのか。彼らの背後に感じられる「漢族」の存在を裏付ける人の動きと接触の実態については、目下のところ詳細は不明である。しかし、楚雄市と雨露郷との対比から、非漢民族にとって、漢族との対峙が、自らのアイデンティティの危機、つまりアイデンティティの変更を強いられることになるような状況下では、厳しい民族間関係のためか、あるいは弱者としての状況に適応しつつ自らの特徴をどこかに残す選択の結果か、

民族集団間の境界や関係を語り、説明する言説が多く生まれる、と考えた場合、楚雄州において見出された状況の解釈はたやすくなるように思われるのである。

文 献

楚雄彝族自治州地方志編纂委員会編

1993 『楚雄彝族自治州志』人民出版社。

葛季芳

1984 「禄豊火葬墓及其青花瓷器」『文物』1984年第8期：85-90頁。

李家瑞

1960 「滇西白族火葬墓概況」『文物』1960年第6期：52-55頁。

牧野巽

1985 『牧野巽著作集第5巻・中国の移住伝説・広東原住民考』御茶の水書房。

尤中

1994 『雲南民族史』雲南大学出版社。

横山廣子

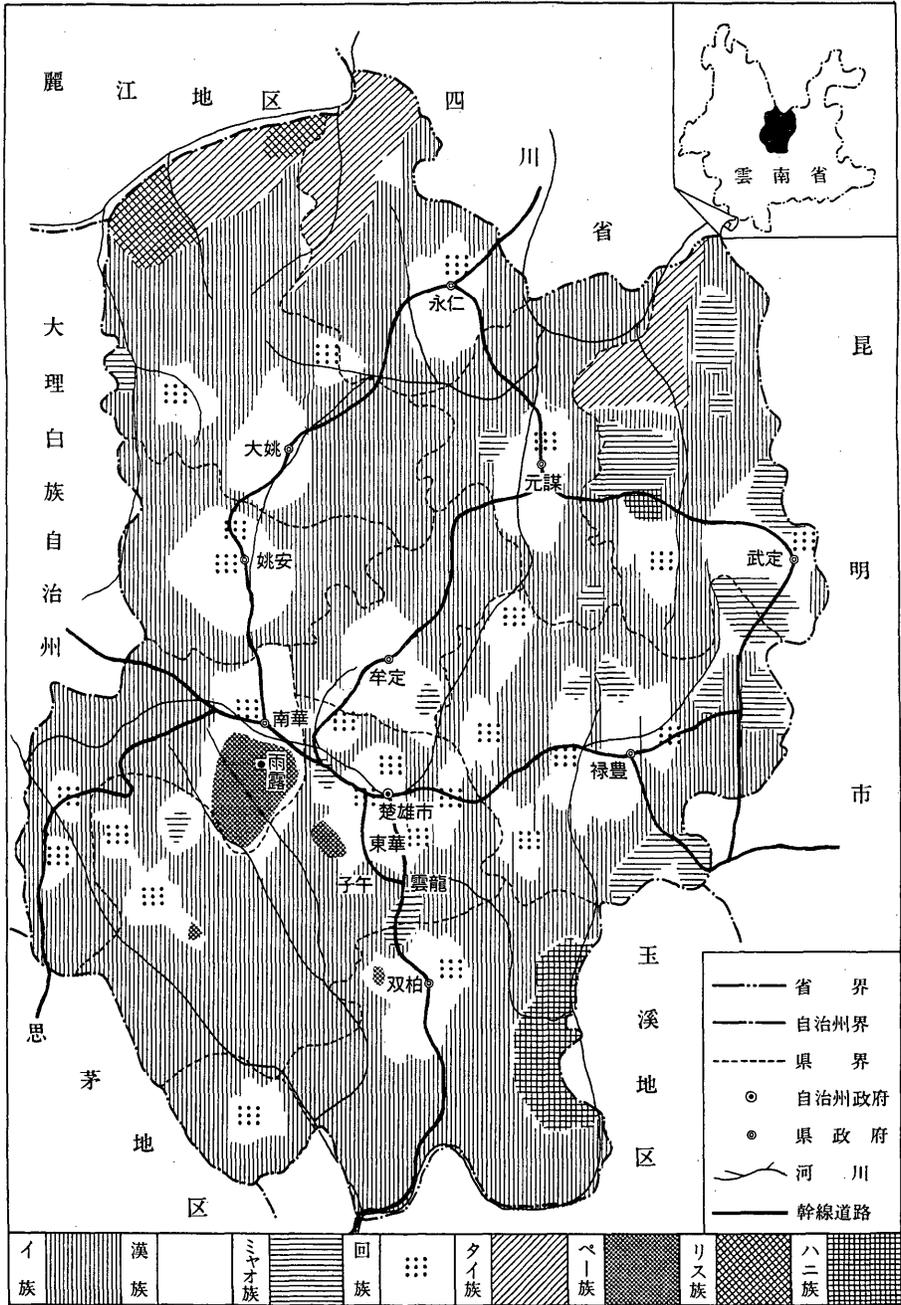
1994 「年中行事と民族間関係—火把節から見た民族境界—」竹村卓二編『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相—』風響社。

張樹芳編

1993 『大理叢書・金石篇』（全10冊）中国社会科学出版社。

張錫祿

1992 「南詔国王蒙氏与白族古代姓名制度研究」『南詔与白族文化』華夏出版社。



楚雄イ族自治州民族分布図



写真1 子午鎮Y村楊G氏の祖先の墓碑銘(漢文)

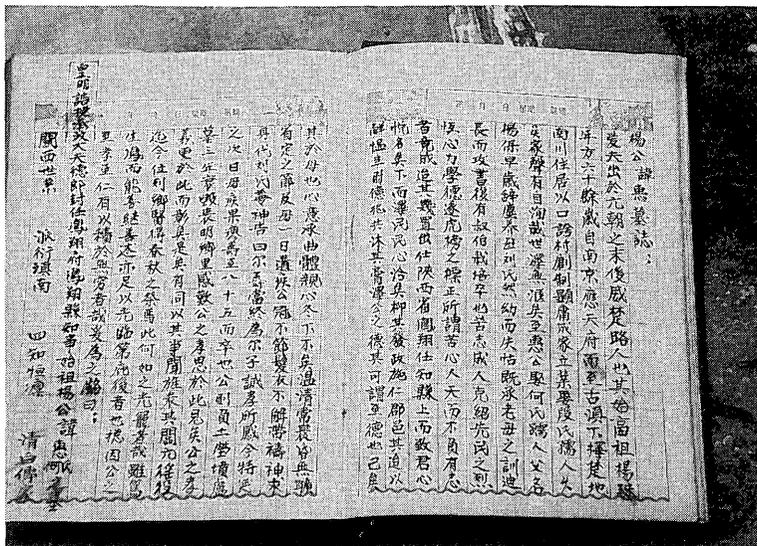


写真2 子午鎮Y村の楊G氏が筆写して残してきた祖先の墓に刻まれていたという銘文



写真3 子午鎮Y村の墓地の一角に見られる3段構造の火葬墓



写真4 子午鎮Y村の墓地にある祖先の埋葬墓

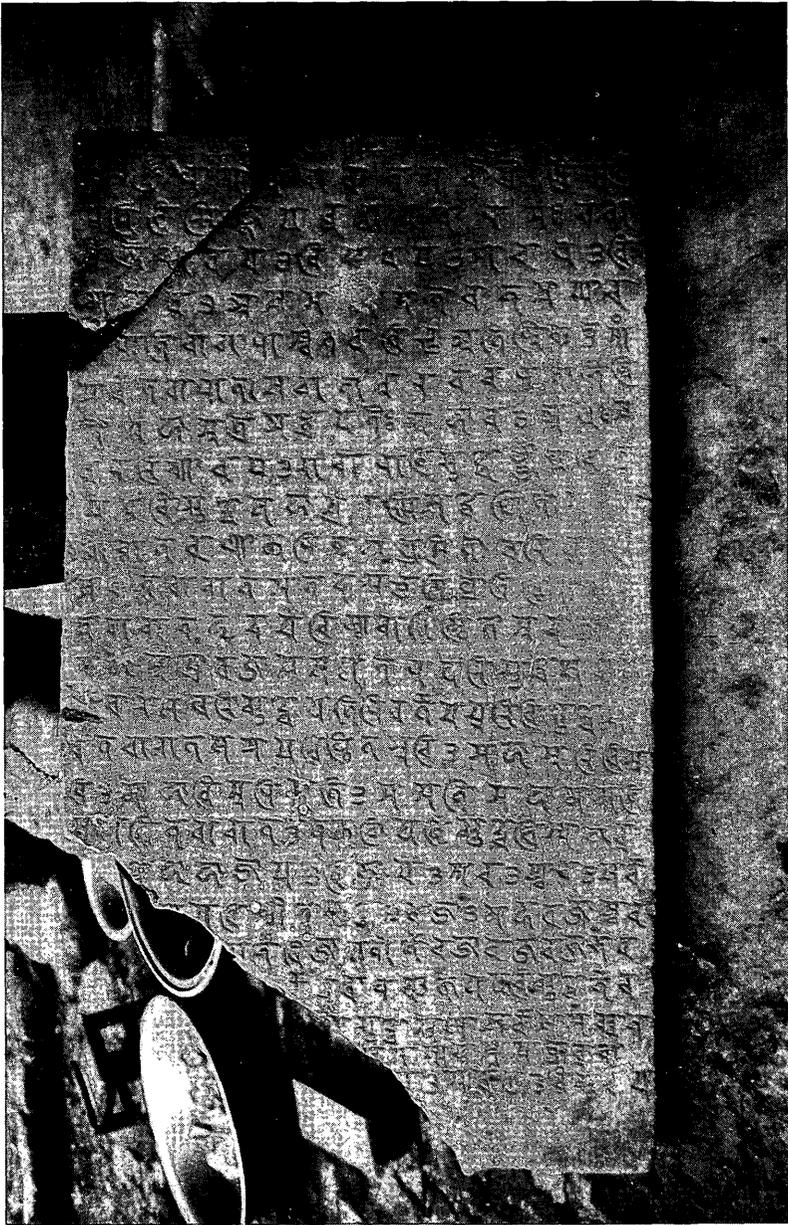


写真5 楊氏の祖先の墓碑(漢文の裏面に刻まれた梵文)

